

11月(November)

29.10.2023 – 25.11.2023

一ヶ月の間、かつてギャラリーだった空間が「November」と題された展覧会にレディメイドの演台を提供する。「November」はパンデミック中の2021年夏にドイツのケルンで開催された「July, August, September」に続いて構想された秋の展覧会で、14人・組のアーティストによる作品で構成される。参加作家たちの実践に共通するのは、私たちの日々の生活とコンテンポラリー・アートをめぐる諸々の言説が織り成す布地に、それぞれの作品がシフトをもたらし、折り目を付ける点だろう。そこでは美術史の既存の正典、建築的・心理的・空間的な儀式、習慣、生の尺度、諸々のコンセプト—アイデンティティを含む—が、制作行為のためのマテリアルとなる。ここから、制度的な権威の囁やかな不安定化、詩的な魅了、解放、あるいは抵抗の簡潔なサインなど、アーティストの幅広い役割に関する問いが生まれる。この枠組みのなかで本展の各作品が、生産的なせっかちさ、未来の形成へのニュアンスを帯びた意志とともに提示するのは、アートが世界に対してアートならではのアクセスを開くことへの確信である。

このプロジェクトは、ケルン展が孕んでいたパンデミックの不安定性による流動的な力動、そして歴史的な参照点である、ロケーションやサイト、社会においてアートが担う役割の制度的なモデルといった問題について熟考した1969年の展覧会「July, August, September」（企画：セス・シーグロブ）を鏡のように映し返す。ギャラリー空間のあらゆる部分が展示に活用される。正面出入口と裏口の両方が、ギャラリーの有機的な部位として等価に扱われる。空間は、かつてのテナントが撤収した状態のまま保たれている。この場所に残るかつての使用の痕跡を受け入れ、組み込むために。

コントリビューション：

進行中のシリーズ「Love Streams」においてドラ・ブドール（1984年クロアチアのザグレブ生まれ）が、抗鬱薬を紙やすり上に擦り付けることで指し示すのは、この種の薬剤—選択的セロトニン再取り込み阻害効果によって、この星に住む数えきれない人々の生を支えている—を通じて放出された「マインド・アーキテクチャ」の姿である。

ケネス・バーグフェルド（1991年ドイツのベルギッシュ・グラートバッハ生まれ）が絵画を通じて取り組むのは、彼自身の顔貌の様々なバリエーションである。それはバラバラに散逸したパーソナリティに関する想像のための枠組みとして機能する。その作品は色彩、構成、消費への純粋な喜びに溢れている。

フェミニスト・ランド・アート・リトリートは2010年に設立されたカナダ人アーティスト二人組。「November」展のために、2010年に制作された2点の作品が再制作／再演された。ひとつは2010年に制作された、二人の活動開始をアナウンスするポスターである。そこには潜在的な撤退の期日とともに、鏡映しになった《スパイラル・ジェッティ》（ロバート・スミッソン）が見える。もうひとつはクストフェレイン・ミュンヘンでの二人のパフォーマンスの広報用シャツである。アートの言説が男性に支配されてきたことへの参照として、ローレンス・ウィナーによるテキスト作品のグラフィカルな様式が用いられている。それは、典型的に「女性的な振る舞い」として歴史的に括られてきた「ヒステリカル」性をユーモラスに指し示す。

1980年代からルイズ・ローラー（1947年アメリカのプロンクスヴィル生まれ）は、商業施設、個人宅、美術館といった環境に置かれたアートの作品を写真におさめてきた。「Adjusted to fit」はそれらの写真をギャラリー空間という次元に再適用するシリーズ。そこで彼女は、もともとの被写体の同定

が不可能になるほど、イメージを粗くしたり切り抜いたりする。今回の作品の場合、もともとの被写体はソル・ルウィットによるウォール・ドローイングである。

N.E. One &c. (2023年にベルギーのブリュッセルで設立) はアーティストのルシアナ・ハナキ (1987年ペルーのリマ生まれ) と奥村雄樹 (1978年日本の青森生まれ) による二人組で、「えにわん えとせとら」と読む。本展では「Identity-Transformation」シリーズから7点を発表。同シリーズでは、ハナキと奥村のどちらか (あるいはときにどちらとも) の実践において着想・実行された様々な実験から、ある人物のアイデンティティを変形させる方法が抽出、提起される。記入用紙の参照元は、N.E. Thing Co. (カナダを拠点に活動したアーティスト二人組) が自分たちの多様なプロジェクトを等価な「Information」としてファイリングするために用いたフォーマットである。NETCOのオリジナル版は企業の製品目録を思わせたが、NEO&Cによる各エントリーは、むしろ誰もが実行可能なレシピに近い。

ローズマリー・トロツケル (1952年ドイツのシュヴェーアテ生まれ) による顔料プリントを用いた作品《Forced Marriage》は、2022年に彼女が羊毛で制作した作品を写真で捉えたものである。トロツケル独特の羊毛による絵画とその図像は、ミニマリスト的な絵画や抽象をめぐる言説を参照している。それらは、絵具を羊毛に置き換えることで、トロツケルが頭角をあらわした1980年代ケルンのアートシーンにおける表象をめぐる問いにコメントを加える。自身のアイコン的な作品を引用し、それをまた別のコンテンポラリーな視覚言語にシフトさせることで、トロツケルは自作のサンプリングを遂行している。

毛利悠子 (1980年日本の神奈川生まれ) は本展で彼女のシリーズ「Three Musics」より1点を発表する。パンデミック中の引き延ばされた時間のあり方に対処するための儀式を提示する同シリーズでは、各曜日が異なるサウンド・コンポジションへと変換されるが、ここでは「金曜日」が選ばれている。

ベレニス・オルメド (1987年メキシコのオアハカ生まれ) による彫刻言語は、人口装具に似た形体を作り出すことで人体の見方を拡張し、不完全性と機能不全性に潜むポテンシャルを称える。それはまた、健康や病気といった状態に対して、異なる視野を創出するものでもある。

フン・ティエン・ファン (1983年ドイツのエッセン生まれ) は、祭壇に似た物体による進行中のシリーズから、ふたつの新しいイテレーションを制作した。東京の近隣では、無数のカスタマイズされた神社が日々の活動や土着的なスピリチュアリティへの繋がりを表象しているが、対してティエンの実践は、ベトナムと結びついた彼女自身の背景、そして現代文化を形作る言語やコードとの再接続を志向している。

コンテンポラリー・アートは社会にまったく作用しないという結論に至ったシャルロット・ボゼネンスケ (1930~1985) は、38歳で社会学を学び始め、亡くなる1985年まで社会関与的なプロジェクトに取り組みつづけた。モジュール式の彫刻的構造のシリーズ「Square Tubes」は、彼女の実践のうちで最も評価の高いプロジェクトのひとつで、各作品を構成するのは、ランダムに組み合わせることが可能な、都市のインフラの構成部位に基づいた形状である。

島袋道浩 (1969年生まれ) が本展で発表するのは、ケルンでの「July, August, September」に出展が予定されていた作品で、11月1日に作家本人が設置する。同作は、島袋が生まれた年に製造され、ベトナム戦争中にアメリカ人兵士が所有していたジッポのライター、そしてそのライターに彫り込まれていた図像に触発されて描かれたドローイングで構成される。

高倩彤（コウ・シン・トン／1987年香港生まれ）は「Bones」と題された新作彫刻のシリーズを本展で発表する。香港において工事現場の足場に使うことが承認されている特定のアルミ製単管パイプを垂直方向に切断し、そのパーツを裏返して、フェール付きのワイヤーロープで束ねたもの。

ギャラリーの設備面を司る領域では、楊沛鏗（トレバー・イェン／1988年中華人民共和国の東莞生まれ）が作り上げた、小型彫刻によるパラレルなエコシステムが展開している。それらの彫刻は、会場で見つけたマテリアルを活用して制作され、空間の既存のインフラに適応している。シンプルな身振りとマテリアルによって、ギャラリーの裏側スペースが、合成的で植物学的な「菌界圏」のビニールハウスへと作り変えられる。

アリソン・イップはケルンを拠点とするペインター。使い古しの紙箱に描かれたマインドマップを思わせるドローイングは、職場で賃上げを要求することを彼女自身にリマインドするもの。記載されたウェブサイト（www.inflationcalculator.com）は、労働の低価値化と現代の経済的不安定性に関係している。

信頼と献身を寄せてくれ参加アーティスト、本展を助成してくれたノルトライン・ヴェストファーレン芸術基金、協力してくれたゲーテ・インスティトゥート東京、かつてのギャラリースペースの使用を提案してくれたTake Ninagawa、そして支援してくれた各ギャラリーに感謝する。

ケルンと東京の両プロジェクトについて、Koenig Booksから2024年初頭に出版物が刊行される予定である。

このプロジェクトはカーラ・ドナウアーによって、マーティン・ゲルマンの助けを借りながら組織された。